

開発途上国の課題をもっと知りたい
● なごや地球ひろば ●

なごや地球ひろばがオープン! ～中部地域から世界へ～

6月1日、中部地域の玄関口・愛知県名古屋市にオープンした「なごや地球ひろば」。開発途上国の問題や国際協力をさまざまな角度から楽しんで体感できるこの施設に、ぜひ一度足を運んでみよう。



(上) 地球案内人の説明は来館者の年齢層や関心などに合わせて工夫され、市内の高校生が訪れたこの日は、クイズ形式で進められた。なごや地球ひろばの展示は定期的に入れ替わり、内容に合わせたイベントも行われる。(右) メッセージウォールに自分の思いを張り付ける辻村さん。葉っぱには「みんなの心が豊かになりますよーに。いつも笑顔」と記した。(左) フェアトレードショップ「フェアビーンズ」。各商品にまつわるストーリーは、木村醸店長(左)が教えてくれる

地球案内人のガイドで 世界を知る

見て聞いて触れて国際協力を体感する。そんなわくわくするような空間が、6月1日、愛知県名古屋市にオープンした。その名も「なごや地球ひろば」。アフリカの子どもの生活が描かれたガラスの壁を通して太

陽の光がさんさんと降り注ぐ館内。世界の人々の暮らしや日本とのつながりが分かる体験キットが並べられ、それらを手に遊ぶ高校生などにぎわう。名古屋駅から徒歩10分、最寄りのさしまライブ駅からなら3分足らず。修学旅行先にはもちろん、買い物帰りにちよつと立ち寄るのも良さそうだ。

エントランスを抜けると、ま

ガイド役の「地球案内人」に促され、一人の生徒が「世界の人口?」と自信なさげに答える。「正解!」

そう、この掲示板は世界の人口が日々増え続ける現実を、視覚的に伝えるものなのだ。展示の目玉は4本の柱。世界が今抱えている「貧困」「教育」「保健」「環境」の4つの問題に

ついて、クイズに答えたり模型に触れながら学ぶことができ。「世界で5人に1人がどのような生活をしていると思う?」。透明の柱に書かれた「5人に1人」の文字を指差しながら、地球案内人が学生に問うと、「学校に行けない?」「ごはんを満足に食べられない?」「病気で死んじゃう?」と生徒たち。「これは1日1ドル以下で暮らす人の数。日本円でだいたい100円。みんな、朝昼晩の3食におやつ、1000円で間に合うかな?」「...」。柱の裏には、10体のやせた人形と10体の太った人形が並んでいる模型があり、それが世界の飢餓人口と肥満人口を意味することを知った生徒たちは、驚きを隠せない様子だった。

来館者の一人、愛知県立千種高等学校3年の宮武遼(はるか)さんは「普段の生活の中では知る機会が少ない途上国の問題や国際協力の大切さを学べてよかった。地球案内人の方の話を聞いて、将来自分も協力隊に参加してみたいなりました」。また、同校3年の辻村真未(まみ)さんは、「貧困は大きな問題ですが、お金や物だけじゃなくて、心が豊かになることも大事だと感じました」と話した。

また、フェアトレードショップが併設され、買い物を通じて国際協力に参加できるものもこの施設の魅力。途上国の人たちが作りのアクセサリーから小物、バッグ、お菓子のほかに、JICAボランティアが現地で製作を指導した手工芸品なども販売されている。

そして、ひろばで楽しく学んだ後にオススメなのが、アジアやアフリカなど現地の味が堪能できる「カフェクロスロード」。ランチならフェアトレードのコーヒー・紅茶が飲み放題。世界の珍しいビールも取りそろえられ、子どもから大人まで食事を通じて異文化を知る格好のスポットだ。

2階には、市民による国際協力活動の成果を発信するためのセミナー(予約制)、各団体のミーティングなどに利用できる市民活動ルーム、協力隊OB会などが活動する社会還元

ルームといった貸し出しスペースもある。

今日を真剣に生きよう。帰り際、エントランスに向かう途中で目に留まったのは、メッセージウォールに書かれていた一つの言葉。そう記したのは、KTC中央高等学院3年の久木田遼(はるか)さん。「世界の子どもたちが懸命に生きていることを知って、自分も一日一日を真剣に生きたい、そう思ったんです」。

中部地域から世界へ。なごや地球ひろばは、市民一人一人の国際協力を応援する拠点としてスタートを切った。

※展示案内やイベントなど地球案内人の補助活動を行うボランティア。岐阜県、静岡県、愛知県、三重県の18歳以上が対象。



「1つの地雷を撤去するにはいくらかかるか」と書かれた模型をてんびんに載せ、100円、1,000円、1,200円...いくらかで釣り合うか、模型のお金で試してみる久木田さん(中央)

力隊のOB/OGだ。国際協力の現場経験を生かし、展示の説明はもちろん、「国際協力ってどんなこと?」「JICAボラ

全国に国際協力が身近になる施設

名古屋以外にも、国際協力を身近に感じられるスペースがあることを知っているだろうか。東京の「JICA地球ひろば」。「途上国を知りたい」「何かやりたい」という市民のための施設として2006年にオープンし、修学旅行生から一般の方まで、来場者は年間約10万人。数カ月ごとに変わる企画展示では、食料や感染症など私たち日本人にとっても身近なテーマを、地球案内人とともに見て触れながら考えることができる。また、全国のJICAの国内機関にも、各地の特色を生かして国際協力の情報を展示するスペースが設けられている。最寄りの国内機関に出掛けてみよう。

(右)「人と地球に優しいエコセンター」をコンセプトに造られたなごや地球ひろばでは、ソーラーパネルで発電し、雨水をトイレで利用している(一部)
(左) 世界の料理がお手軽価格で味わえるカフェクロスロード。来日中のJICA研修員の食堂でもあり、異文化交流の場になっている

